

二千年の歴史を語る
府社 御嶽 神社

武州みたけ

第六十四号



『霧の御坂』

昭和初期、御岳登山鉄道株式会社発行の観光パンフレットの裏表紙です。この御坂に七代の瀧から上り立つ狭霧の情景を『霧の御坂』と呼びます。現在銅鳥居上の石段は往古の風情が残る唯一の場所として、令和六年十二月、青梅市の補助を受け復元保存修理を終えています。

第五十二回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 一百九十四句

選者 蕃目良雨

特選

法螺貝の鳴るや斑雪の奥の院 青梅市 津布久信雄
 雷激す騎乗重忠たぢろがず 日の出町 渡邊敏雄
 神門も磴もはやばや掃納 立川市 堀江孝晴

秀逸

夏空に御嶽神社の三百段 西東京市 ちもも
 満タンの灯油や御師の冬館 宮城県刈田郡 我妻 遼
 ももんがの飛びたる御岳緑の夜 川崎市登川区 柳田敦子
 暑き日も顔色変えぬ大口真神 西東京市 度刀人十

佳作

じゅうやくくぼ毛虫のボロにまた会えた 大田区 泉水瑞子
 己年同志嫁と仲良く初詣 世田谷区 武田和子
 百年の茶屋のぬくもり千代の春 狭山市 松本きみ枝
 初明り都の天にほんのりと 目黒区 大河裕子
 山の恋駅に預けて赤とんぼ 練馬区 川村能正
 選者吟 宝船御岳山は雲の海の上 堀江孝晴

第五十三回 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
- 一、受付は指定用紙にて投句箱へ 四季を通じ「御岳山を題材」とした俳句を募集しております。
- (郵送等直接の受付は致しません) 大勢の方の投句をお待ち申し上げます。
- 一、締切り 令和八年二月十五日
- 一、発表 令和八年三月中旬

奉納俳句選評

法螺貝の鳴るや斑雪の奥の院

津布久信雄

奥の院は本殿に祀る神のその祖に当たる神を祀るところ。その神社の秘中の秘の神さまを祀るのだろう。雪深い時期は中々近づけないが春が近づくにつれ斑雪が見えるようになる。道が露われてお参り出来るようになる。それでも雪道には違いなく御師のような健脚の人以外は近づくのが難しい。奥の院に法螺貝が鳴るようになり春が近づいてきたことを感じた作者である。

雷激す騎乗重忠たぢろがず

渡邊敏雄

山の雷は激しいものだろう。島山重忠の騎馬像を見れば激しい雷にも関わらず乱れる様子が見えない。像だから当たり前なのだが、ここに作者は重忠の冷静沈着な人物像を重ねたのだ。歴史上の人物と遊ぶ作者の心意気が一句に結実した。神社は歴史上の人物を思い起させるに相応しい舞台を私たちに提供してくれる貴重な場である。

神門も磴もはやばや掃納

堀江孝晴

神社の大晦日の掃納の光景。家庭ならこの後ゆつくり過ごす時間があるかもしれないが、初詣を迎える神社にはそんな余裕は無い。早々と掃納して初詣の準備にからなければならぬ。「はやばや」に切迫した時間をやり繰りする神社のありようが出ていて素晴らしい。神門、磴と具体的に写生している点もよ。

夏空に御嶽神社の三百段

ちもも

暑い時に上る御嶽神社は石段が三百段ある事しか記憶に残っていないのかもしれない。苦しい時に参拝して得られたある夏の記憶。

満タンの灯油や御師の冬館

我妻 遼

御岳山頂にある御師の家の冬支度を描く。山頂までの山道を車で案内していたことがあがるが、あの急坂を冬期に車ですり下りする困難をこの句は暗示している。山道を走れるうちに灯油を満タンにする生活の知恵の現れだと思った。

ももんがの飛びたる御岳緑の夜

柳田敦子

ももんがは冬の季節になつてはいるが、御岳山では夏の夜でも自由にももんがが飛んでいる。森の句がしてくるようだ。

暑き日も顔色変えぬ大口真神

度刀人十

大口真神(おいぬさま)伝説の御嶽神社ならではの句。狼を「おいぬさま」と親しく呼び慣わして神前を守る狛犬ならぬ「おいぬさま」像の優しい姿に感入して、暑い日に顔色を変えないで頑張っていると思いを寄せる。

御嶽神社あれこれ

『御岳山の屋号・苗字・名前』

権禰宜 朝矢 嘉史

「金丹さんの講社の太々神楽奏上は十一時からです」「宿直は卓也くんとアイさんです」「ミナミさんが日供を持ってきた」「山の動植物については神田さんに教わるといいよ」などと、神社ではこのような会話が交わされています。

「金井」「神田」は苗字、「卓也」は名前で、「アイ」「ミナミ」は女性の名前にも見えますが、アクセントが異なります。実はこれらは御岳山の各家の「屋号(家号)」の例です。

現在は商家や歌舞伎役者などの屋号がよく知られています。御岳山の各商店の屋号は、ケールカー御岳山駅前の富士峰軒・玉亭支店、神社鳥居前の亀屋・駒鳥売店・千本屋・紅葉屋です。

ただし、元々は屋号とは村落の各家の通称で、「屋敷名」ともいいました。御岳山の御師たちにも苗字とは別に屋号があります(屋号と苗字が同じ御師もいます)。御師の苗字や屋号に由来する名前の宿坊もあれば、苗字・屋号とは別の宿坊名を称する御師もいます。

御嶽講があるような古くからの集落では、同じ苗字の家が多いため、かつては屋号で呼び合っていました。歌舞伎役者同士では、例えば「播磨屋のおじさま」「中村屋のおにいさん」と、現在も屋号で呼ぶようです。御岳山でも苗字・名前と屋号を用いて呼び合う慣習が江戸時代から続いています。

天保五年(一八三四)刊行の『御嶽菅笠』は、秩父郡出身の国学者齋藤義彦が、江戸日本橋から御岳山までの道中を紹介した書です。御岳山上に至ると、神主・御師各家を屋号と苗字、名前を駆使して順番に叙述していきます。

まず「いらかならべし家々は誰が御師やらん黒田堂、黒田木工(現在は黒田耕、屋号「大西」、宿坊丸山荘です)(以降も天保五年と現在の御師名、屋号、宿坊名の順に記します)。江戸時代の神職の名前の多くは、朝廷の役所名(木工は木工寮や旧国名でした)。

続けて「ひだり橋本・朝矢の、えびらになびく片柳高名の下は権正・島中なる秋山の」、橋本は橋本玄蕃(傳)・橋本・静山荘、「朝矢」は朝矢式部(正)・表・うつぼや荘「片柳」は片柳将監(光雄)となり登春利荘、高名は高名監物(秀樹)・あい・高名荘、「権正」は片柳権頭(政光)・前片・片柳荘、「秋山」は秋山造酒(佳久)・秋山(畑中)・秋山荘、です。

表参道を進み、「左近の桜咲みだれ、杉の林の枝しげく、登りは掃部」兵部・勘解由をうち過ぎて、新屋は内匠、「左近」は須崎左近(浩文)・亀屋、「林」は林大膳(一隆)・大道、「登り」は久保田掃部(直行)のぼり宿坊能保利「兵部」は須崎兵部(時彦)・千本屋、「勘解由」は片柳勘解由(茂生)・不入地場・藤本荘、「新屋」は片柳内匠(至弘)・神家・山樂荘、です。

坂道を登りきると、「鈴木、音も清て、宮屋に近き嶋崎や、みおろす家は馬場二軒、大学・求馬、南下」「大柵民部、上の台、左京の下は青経を織部乃司」鈴木は鈴木伊織(伊織)・鈴木・山香荘、「嶋崎」は嶋崎主計(絶家)・井の上、「大学」は馬場大学(慶太郎)・西・駒鳥山荘、「求馬」は馬場主馬(満)・番場・宝寿閣、「南下」は片柳図書(他出。現在は工房「塗師屋秋道」が所在・南下、「大柵民部」は須崎内蔵(他出)・大木戸、「上の台」は片柳左京(左京)・上の台、「織部」は片柳織部(茂)・南・南山荘、です。

裏参道へ戻って神社へ向かいます。「角は蔵人、原嶋や、水師采女、井戸端をのぼる坂所中務、荷前を差し俵坊」角は須崎蔵人(直洋)・角・巖雲荘、「原嶋」は原島頼母(二臣)・原島・原島荘、「井戸端」は馬場采女(克己)・井戸端・東馬場、「坂所」は片柳中務(他出)・さかど、「俵坊」は朝矢市正(嘉史)・俵坊、です。

裏参道をさらに進み、鳥居前へと近づきます。「岸野柳の枝垂て、長門・山崎、大宮司は國兼朝臣の苗裔とかや、尾崎を過ぎて、御刀代を作る久保田の向股の」「山中豊後家繁き、町谷は刑部梓弓、上のやしきは大内蔵の」「岸野」は岸野大炊(絶家)・おき、「長門」は片柳宮内(正喜)・五判・懸山荘、山崎は山崎要人(絶家)・山崎「大宮司」は金井左衛門(國俊)・屋敷・御岳山荘、「尾崎」は尾崎朝負(絶家)・尾崎、「久保田」は久保田齋宮(英明)・町・町久保田、「山中」は服部豊後(朋也)・山中・山中荘、「町谷」は服部刑部(博美)・麻知家・宿坊麻知家「上」は須崎大内蔵(裕)・上・西須崎坊蔵屋、です。

『御嶽菅笠』に書かれた山上の神主・御師三十五軒のうち、八割の家が約二百年後の令和七年(二〇二五)現在も存続しています。各家の所在地も約八割は現在と同じですが、屋敷の位置を変えた家もあります。

例えば『御嶽菅笠』刊行から二年後の天保七年、久保田齋宮と鈴木伊織は両家の「屋敷・地面・家作」を交換しています。久保田英明家(町久保田)と鈴木伊織家(山香荘)は現在も交換後の地に所在し、伊織が出した証文が久保田家に、齋宮が出した証文が鈴木家に伝えられています。

屋号には御岳山の伝統が反映されています。『御嶽菅笠』を手に山上を歩いて歴史を感じ、武蔵御嶽神社に参拝しただけだと思います。



「屋敷・地面・家作」交換証文 (上：久保田英明氏 所蔵) (下：鈴木伊織氏 所蔵)



山中に穴掘り暮らした男の二〇〇日 (二)

— 長尾の峰といふ處 —

前回のおさらい

大正・昭和期の謎の絵葉書『武蔵國御嶽山村并弦齋先生の居穴』。自然に囲まれ自然を食す『天然生活』を望んだベストセラー作家・村并弦齋は、御師を介して御岳山中にテントを張り、のちに「竪穴式六居」をつくり暮らしたという。

時は大正九年（一九二〇）。当時では老人の域に差し掛かろうという五十七歳の村并弦齋は、二二〇日もの間、御岳山のどこで暮らしたのか。そこは取材陣や見物人に「こんな所」と気味悪がられる、草木繁り、獣のみならず天狗さえお出ましになりそうな場所。弦齋の世話役をつとめた西須崎坊の御師・須崎宮治氏はこう語る。

「平生誰も行かないから荊棘路を塞ぎ、兎や狐狸の棲むに任せてあります。風景は関東の平野を瞰下して最も佳絶であり、獨立峯なれば塵俗の氣も無く、人の來る事も無く、これならば全く世間に遠ざかって獨り天然生活を肆まにする事が能きませう」

案内された弦齋が感嘆し、生活の舞台に是非と即決したその地の名は、『長尾の峰といふ處』

長尾の峰。現名称は長尾平。当社より石段を下り徒歩十分ほどの、東向きに突き出た尾根。中腹は開けた平地で、緊急用のヘリポートを兼ねている。突端は展望台となっており、遮るものなく関東一円を眺めることができる。春にはカタクリや桜が咲く、山の民もふらりと散歩に行く憩いの場。にわか信じがたいが、当時はここが〈荊棘塞ぐ獣棲む地〉だったのだという。

それもそのはず。御岳山が観光整備されたのは弦齋が去ったあとのこと。関東大震災からの復興事業を終えた昭和七年（一九三二）、東京府に「東京緑地計画協議会」が発足。都市部に緑ある街を計画する傍ら、優れた景観や自然を保護する景園地を指定。昭和十年（一九三五）より、特に利用者の多かった伊豆大島・高尾・御嶽の三地区に注力して自然公園の整備をはじめ。御嶽景園地の概要はこのとおり。

「御嶽神社と、其の周囲の原始的境内林よりなる神域を中心として、各々約二料キロメートルの地点にある山巔、即ち東の日ノ出山、西の鍋割山、南の高岩山及北の大塚山で、何れも標高九〇〇米以上の四山を展望場に選定し、此等の間に存在する富士峯及長尾平を野遊場に、又御嶽山古來よりの名所であるところの七代瀧・天狗岩及綾廣瀧の一带を遊歩場とし、その一部に自然風大岩石園を設定し、以て此等各主要施設地を相連絡する道路、即ち慰安・休養並教化に資する逍遙路を開設」という。

また、長尾平がなる「野遊場」とは、「苑地の重要な要素をなす施設で、大衆の離合集散、休息、学童の単なる「あそび場」等、広範囲に使用される園地。設備としては、広い空地（芝地）に野外卓、水栓、休息所、便所および適度の修景植栽を設ける程度である」とのこと。岩石園、つまりロックガーデンをはじめとする現在の主要な周遊コース、ハイキングコースがほぼこの時に形づくられ、長尾平もほぼそのまま。三七一〇ヘクタールにおよぶ整備と時を同じくして御岳登山鉄道も旅客営業を開始。豊かな自然と歴史がひろく知られ、のちに一带を含む国立公園指定へと繋がっていく。

ただ、おそらくこの整備によって弦齋の穴居は跡形もなく失われた。弦齋の穴居を写した絵葉書や写真は整備以前の長尾平を写した貴重な資料なのだが、残念ながらほぼ建物しか写っており、周囲の様子はおろか、どの地点に建っていたのかもわからない。ただ、穴居をつくるための社有地工事にあたり須崎宮治氏が神社へ提出した願文は「長尾峯頭仮拝借願」、それを受けた神社の議事録には「長尾峯先」と記されているほか、弦齋も穴居について「天幕（テント）のあった峯の前の懸崖」、「正面は東向き」、「朝は日光が奥の壁まで照らし」と表現しているため、突端に位置したのだろう。現在も突端まで行けば、弦齋が描いた「眼下にあがる花火」、「沖の舟を数える」などの景色を体感することができる。ともすると、整備の十年以上前に行われた穴居

生活と連載記事が長尾平の評価を上げ、野遊場・展望台として開かれる一要因となったのかもしれない。というのは言い過ぎだろう。

さて。実は、この緑地保護・整備を推進するコラムや論評などにも、弦齋が用いた《天然生活》という言葉を使用するものがある。欧米の、家庭に隣接して緑を育み愛でる庭園(ガーデン)や、公共の憩いの場としての公園(パーク)という考え方に触れ、自然豊かな都市のあり方、余裕ある理想的な暮らしを《天然生活》と銘打っている。当時は、動物の生活、「野生」をも表すこの言葉だが、この時期から指し示す意味が変化してきているようだ。

では、弦齋の目指した《天然生活》とは何だったのか。これは言葉も意味もそのまま、大正六年(一九一七)に翻訳出版されたドイツの医学者アドルフ・ユストの『天然生活』に端を発する。弦齋が編集長を務める『婦人世界』誌でも取り上げられたこの本は、衣食住すべて、その地・その時の自然の流れにあるもの成るものをそのまま、できる限り加工せず受け入れることを良しとする心身健康法であり、弦齋の語りとはほぼ一致する。加えて食に限れば、栄養学が進展し、高カロリー・高蛋白質を求める食生活が決して正しいものではないとにわかに語られはじめたことも、自然食を後押ししただろう。弦齋はこれらの論説や最新の研究を取り入れ、自身の断食や木食の研究・体験と照合し、日本の地で自身が行うために落とし込んだ、いわば弦齋式天然生活法を実験するための舞台としてはるばる御岳山へとやって来たのだ。

弦齋の山中生活記には、今では失われてしまった様々な山の様子も記録されている。山へ分け入りながら採れる季節の果実や山の幸。たとえば九月下旬、採りたてならばいくらでも食べられるという至高のイケビ。居て当然というくらいに描かれるヤマドリやウサギ。山の民たちが雨も厭わずにこぞって終日広い集める栗。栗については、神社付属地たるこの地には多数残されているが、伐り出して木材にばかりしているといつか食物欠乏に陥るぞ、と警鐘さえ鳴らしている。残念ながら、現在のこの山に多くは残されていない。また、九月二十九日、騎馬にて行われる流鏑馬神事。決まって雨が降ることから「雨祭り」とも呼ばれていたという。当の弦齋は、勢いを増す大雨のなか消えずに燃え続ける篝火にばかり注目していたようだが。加えて十二月上旬

二尺ほどの積雪のうちに奥の院付近で発見したというオオカミの足跡。弦齋のちに知り合った奥多摩の猟師に聞いてみたところ、オオカミのものと確認できた、とのこと。ニホンオオカミの生息記録は明治三十八年(一九〇五)、奈良のものが最後とされるが、それから十年以上経ったあとも、このあたりにはまだ暮らしていたのかもしれない。

弦齋の山中天然生活を、「ネタに行き詰まって話題づくりに突飛なことをしている」と揶揄する記事も出たらしいが、まあ、そういう側面もあったのかもかもしれない。ただ、弦齋について調べていけばいくほど、あながち突飛でもなく、むしろ筋が通っているのかもしれない、と思いたくなるのである。

第三回、「二〇〇年前の現代人」へつづく。(文：権禰宜服部朋也)

【主要参考文献】

- 黒岩比佐子「食道楽」の人 村井弦齋(岩波書店、平成十六年)
- 東京都公園協会「公園緑地関係実務用語集(その八)」都市公園 第九号(昭和三十一年)
- 山崎典「御嶽景園地展望施設に就て」造園雑誌 第六巻 第一號(日本造園学会、昭和十三年)
- 東京府土木部土木庶務課編『東京緑地計畫概要』(昭和十三年)
- 村井弦齋「武州御嶽山に於ける私の山中生活」婦人世界 第十六巻 第一號(大正十年)
- 村井弦齋「山中生活の経験より得たる登山の心得」婦人世界 第十六巻 第七號(全業之日本社、大正十年)

<御嶽山周辺と世情>

明治 6年 (1873)	講と御師により「綾風の滝」周辺を開拓整備する
大正 3年 (1914)	主な交通機関は乗合馬車 第一次世界大戦(～大正 8年)
大正 4年 (1915)	この頃から稀に自動車が行き通るようになる
大正 5年 (1916)	地域一体に電灯が敷設される(御岳山を除く)
大正 7年 (1918)	夏に米騒動、秋からスペイン風邪が大流行する
大正 9年 (1920)	1月 青梅鉄道 青梅駅～二俣尾駅まで開通 8月 14日 村井弦齋、御岳山中天然生活開始(～翌 3月 23日)
大正 11年 (1922)	二俣尾駅～御嶽(字中野)間の定期自動車が開業
大正 12年 (1923)	4月 25日 青梅鉄道電化 立川～二俣尾間を 28分短縮
昭和 4年 (1929)	9月 1日 関東大震災 この地域に大した被害はなかった 9月 1日 青梅電鉄 二俣尾駅～御嶽駅 開通
昭和 10年 (1935)	1月 1日 御嶽登山鉄道 運輸営業開始 7月 東京府営「御嶽景園地」工事(～昭和 14年頃)
昭和 14年 (1939)	9月 1日 第二次世界大戦(～昭和 20年 8月)
昭和 19年 (1944)	2月 1日 御岳登山鉄道 戦争による金属供出のため営業休止 御嶽周辺に川井玉堂や吉川英治、朝倉文夫らが疎開
昭和 25年 (1950)	7月 10日 「秩父多摩国立公園」指定
昭和 26年 (1951)	6月 29日 御岳登山鉄道 運輸営業再開
平成 12年 (2000)	3月 6日 岩石園周辺が東京都名勝「奥御岳景園地」に指定 8月 10日 「秩父多摩甲斐国立公園」に名称変更

権禰宜 久保田 享



私がこの山に帰ってきて早20年が立ちました。神主で神社に奉仕し、家に帰りお客様をもてなし、観光について会議に参加し、消防団員として人命救助を行う。そんな私は「何足もの草鞋」を履いています。今回は私が奉仕する神社の太々神楽についてお話ししたいと思います。

神社に伝承される神楽は江戸時代に江戸真崎稲荷より伝わったとされています。面神楽一三座、素面神楽が三座あり、東京都の無形民俗文化財に指定され、それぞれ口伝により継承しています。

その中でもすでに失われた神楽もあり、現在では神楽奏上が少なく舞の伝承だけではなく、楽屋の演奏も危機にあります。悲しい事に神社に申し込まれる神楽だけでは数がこなせず、平成二十二年から「夜神楽」と称し、六月から十一月の第三日曜日午後八時から神楽殿にて無料で公開しております。神楽の伝承を目的とした背景があるのですが、それでも継続はとても困難だと思えます。

さて神楽を舞うにあたり、先ず、最初に習うのは奉幣ほうへいという翁が四方を祓い清める舞です。だんだん上手に舞えるようになると次の神楽を習います。習う神楽によつては複数人で所作を合わす舞や、また一人でも動きが激しくつらい舞があります。さらびやかな装飾が施された重い装束、お面を付けての狭い視界、そして神楽の中では「胴作り」と呼ばれる中腰の姿勢を保ちすり足での移動と、かなりの運動量となります。

口伝での伝承なので先輩の意見は絶対です。その中で良くある事が、甲先輩が「こーしろ」と言えば、乙先輩が「そーじゃねえ」、丙先輩が「いやそこはこーだろっ」と言った具合に三者三様になる事があるのです。

その場合は大変です。甲先輩が見てる場合は甲流に、乙先輩が見てる時は乙流にしなくてはなりません。では両方の先輩が見てる時にはその中間で踊らなければなりません。そうこうして回数をこなす内に、自分がやりたい神楽はあの先輩が上手いから真似てみようとなります。そうして少しずつ上達していくのです。私自身まだまだ下手で踊れず、先輩にこはこはどうでしたっけ? などと聞くこともしょっちゅうです。

江戸時代に伝わり今に至るまで、様々な形をかえ、現在に残る神楽はもはや御岳山流神楽と言つても過言ではありません。昨年は神楽が伝わったとされる真崎稲荷(※石瀆神社)の1300年祭が行われ、その中で当社の神楽も奏上されました。憎越ながら私も神楽を舞わせて頂いたので、川からの心地よい風と眼前に望む東京スカイツリーとビル群が時の移ろいを感じ、悠久の時を経て現代で原点に帰るといふ思いで胸が高鳴りました。

※真崎稲荷は大正十五年に石瀆神社と併合されました。



「あれ、この道、明るくなりました!」

あれ、この道、明るくなりました?

現在御岳山では、ナラ枯れによる樹木の伐採が進められています。特に、武蔵御嶽神社の境内地や参道に生えているナラの木々が影響を受けており、この伐採にかかる費用はすべて所有者である神社の負担となっています。ナラ枯れは以前の武州みたくでも紹介した通り、「カシノナガキクイムシ」と呼ばれる虫が運ぶ真菌によつて水の吸上げを阻害し木を枯らしてしまう病気であり、感染が進むと倒木の危険性が高まります。そのため、安全対策として、伐採が急務とされています。

伐採作業により、境内地や参道の景観は変わり、参拝者にとつても視覚的な影響が避けられません。また、木々の伐採には費用もかかり、神社にとつては経済的な負担が増大しています。樹齢五〇年をゆうに超すような大樹を伐採するのは心苦しい面もあります。が、それでも、この取り組みは御岳山の自然環境を守るために欠かせないものであり、特に倒木による事故を防ぐためには必要不可欠な措置であります。

また、切り倒した木を少しでも有効利用するため、キノコの栽培に活用し

権禰宜 馬場 慶太郎

たり、ストーブやアウトドア用の薪として利用するなどしています。

御岳山は多くの参拝者にとつて信仰の対象であり、観光地としても重要な場所です。そのため、自然環境の保護と安全の確保を両立させることが求められています。ナラ枯れによる樹木の伐採は、今後の参拝者や登山者、地域住民の安全を守るための重要な一歩です。また、このような取り組みを通じて、御嶽神社の鎮守の森ともなる、御岳山の自然との共生に今一度着目し、持続可能な地域づくりを進めていくことが期待されます。



危険木として伐採した樫を薪にした



御岳ビジターセンター

ムサくんだよ

「春を告げる使者」

春を感じるものには何があるのでしょうか？
ウメやサクラのお花、ふきのとうの天ぷらには、はたまたスギの花粉…。

みなさんそれぞれに春が来たなあと感じるものがあると思います。

三月になっても御岳山の山上はマインナスの気温が続くこともあり、春というにはまだまだ寒いです。

ナガレタゴガエルというカエルをご存知でしょうか？毎年その寒い頃、ロックガーデンの沢の中では、ナガレタゴガエルたちのいわゆる婚

活が始まります。

ナガレタゴガエルはつめ

たーい沢の水の中に集まり、オスとメスが出会い、卵を産みます。集まるカエル

の数を数えながら歩いたら、なんと一〇〇匹を超えていたこともありま

す！（カエル

の数は年によ

ります）ビジ

ターセンター

の窓口でもお

客様から、「沢

の中にカエル

がいたのです

が…」と情報

をいただくこともあります。

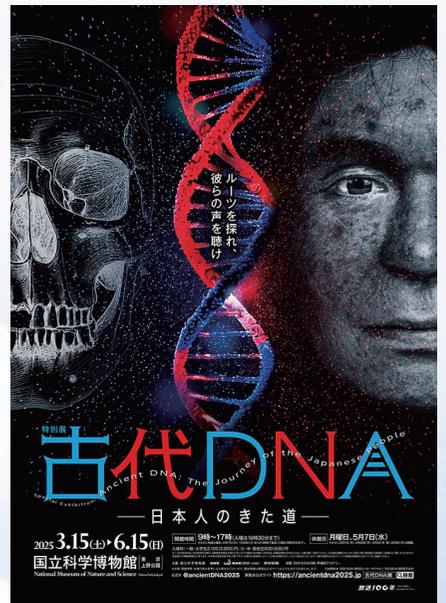


ナガレタゴガエル

が、水の中なので聞こえません。そのため、なかなかその存在に人は気づかないのですが、この寒い時期に活動をしているナガレタゴガエルたちを見ると春の訪れを感じるとともに、なんだか私も頑張らないと励まされます。

ロックガーデンは沢沿いの登山道が1.5km程続いているため、沢を眺めながら歩けます。そして同じ頃に、ハナネコノメやコチャメルソウなども咲き始めます。

みなさまも御岳山に、春を探しにぜひいらしてください。



当社所蔵のニホンオオカミ頭骨が東京上野・国立科学博物館で行われる特別展「古代DNAー日本人のきた道ー」に展示されます。（三月十五日〜六月十五日）

今回出展する頭骨は神奈川県愛甲郡清川村の民家に祀られていたもので、親類に受け継がれた後、当社に寄贈されました。大口真神式年祭の特別展で、清川村煤ヶ谷地区に現存するニホンオオカミの頭骨と前肢を借用したことをきっかけに、貴重な狼の資料を後世に残すため、当社所蔵の頭骨を含めた七体が本年二月十九日、清川村重要文化財に指定されました。これら頭骨はミトコンドリアDNA解析やゲノム解析によりニホンオオカミと認定され、当社の頭骨は形態的特徴からニホンオオカミであると鑑定されています。



